

日本関係洋古書の我が国での受容について

折田 洋晴

本号には、我が国での日本関係洋古書の所蔵状況が報告されている。本稿では、これらの書籍の受容の歴史について簡単に述べてみたい。「日本関係洋古書」という言葉の意味については上記報告に詳しいが、大体“西洋人が日本について記述した書籍のうち、1853年以前に刊行されたもの”を指している。また、「受容」の様態として、書籍の輸入（舶載）と蔵書の形成、邦訳、複製本の刊行などに焦点を当てる。洋書の輸入が江戸時代（特に19世紀以降）に盛んに行なわれたことはよく知られているが¹⁾、対象は主に蘭学又は洋学資料と呼ばれる科学技術関係資料であり、本稿のテーマである日本関係資料に当たるものは多くないようである。以下、時代を追って様子を見てみよう。

キリスト教禁止以前

洋書を最初に我が国に持ち込んだのはキリスト教の宣教師達である。彼らは布教のための宗教書のほか、地理書、本草書などを持って日本にやって来た。その様子は‘*Rol do fato que o P. Mestre Melchior levou pera o Japão o anno de 1554*’という文書²⁾や、17世紀初頭に作成されたマカオの図書館目録³⁾で確認できる。前者にはプトレマイオスの地理書が、後者にはバロス『アジア誌』やエヴォラ版『イエズス会書簡集』などが載っており、宣教師達はこうした日本情報を含む刊本を持ち込んでいた。フロイス『日本史』第1部：序文には、同書の執筆に際して「すでに刊行されている『年報』文献の助けを借り」た旨が記されているので、年報類の刊本も持ち込まれていたことが分かる。しかし、1616年にキリスト教が禁止されると、これらの書籍は国外へ持ち出され、以後、江戸時代を通してキリシタン関係洋書は殆ど流入することはなかったと思われる。

江戸時代の洋書舶載

1641年以降、対欧貿易は長崎出島のオランダ商館を通じたものに限られ、外国書籍の輸入は医薬・外科・航海に関するものに制限された⁴⁾。今日知られている江戸時代の輸入洋書は1万冊を超えるというが、その多くはオランダ東インド会社が解散した1799年以降に輸入されたものである⁵⁾。日本関係書が多く入って来たわけではないが、輸入された例のひとつであるJohann Hübnerの地理書数点は、幕府の紅葉山文庫や蕃書調所に蔵されていたものが、今、当館に蔵されている。この本は蘭学者がよく使ったことで有名で、部分的な翻訳が何度もなされた。江戸時代の蘭書は邦訳される⁶⁾ことで広い読者を獲得した。日本関係書で邦(抄)訳されたものには、J. Nieuhof『東西紀遊』、J. F. van O. Fisscher『日本風俗備考』、E. Kaempfer『日本紀事』、I. F. Kruzenshtern『奉使日本紀行』、V. M. Golovnin『遭厄日本紀事』などがあり、邦訳はないが輸入されていた蘭書にJ. Struys: *Dreie aanmerkelyke reizen* (1746)、W. Schouten: *Reistogt naaren door Oostindien* (1775)などの航海記がある⁷⁾。また、1823年来日したシーボルトも蔵書を持ち込んでおり、伊藤圭介に贈ったC. P. Thunberg: *Flora Iaponica* (1784)は、現在当館が所蔵している。シーボルトは1859年に1,200冊を越す蔵書を携えて再来日した⁸⁾。この中にはカロン、ケンペル、シャルルヴォア、ツェンベリー、ゴローニン、ティチング、メイランなどの有名な日本関係書が網羅されており、現在、この蔵書の一部が在京の3機関(Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens (OAG)、内閣文庫、東京国立博物館)に分かれて所蔵されている。

明治初期

明治になって、過去のキリシタン史が掘り起こされるきっかけになったのが1873年の岩倉使節団ヴェネツィア訪問である。同地で天正・慶長遣欧使節の残した書簡等を見せられたが、それは全く彼らの知識にないものであった。幕末に編纂された『通航一覽』にも遣欧使節についての記載はない。1876年には、仙台での博覧会で支倉常長の遺品が展示されたのを機に、岩倉は太政官翻訳局の平井希昌(1839-1896)に遣欧使節について調査させ、ケンペルやバジェスの著作を使って『欧南遣使考』が刊行されたが、ラテン語の英訳に協力したのが英国公使館のW. G. Aston (1841-1911)であった。在日外国人の日本研究団体の嚆矢であるAsiatic Society of Japanは1872年に、前出OAGも1873年に設立されており、森有礼(1847-1889)や箕作佳吉

(1858-1909)、服部一三(1851-1929)等日本人も会員となり⁹⁾、彼らから情報を得た¹⁰⁾。1878-80年には太政官翻訳掛訳『日本西教史』が刊行されたが、これは鮫島尚信(1845-1880)がJ. Crasset: *Histoire de l'église du Japon* (1715)をパリで見付け、持ち帰って翻訳させた¹¹⁾ものである。同じ頃、太政官修史局はケンペル『日本誌』の翻訳を決めている¹²⁾が、こちらの刊行はなされていない¹³⁾。この他、明治前期に刊行された加古義一編『日本聖人鮮血遺書』(1887)はL. Pagès: *Histoire des vingt-six martyrs japonais* (1862)とL. Pagès: *Histoire de la religion chrétienne au Japon* (1869-70)を¹⁴⁾、浅井虎八郎編『聖フランセスコザベリヨ書翰記』(1891)はH. J. Coleridge: *The life and letters of St. Francis Xavier* (1872)を種本にして翻案したものである。

近代歴史学の導入

明治になると、近代的な歴史記述をめざし、西洋の歴史学方法論が導入された。1887年来日、帝国大学で教えたL. Riess (1861-1928)は大きな影響を与え、門下から村上直次郎、幸田成友など海外交渉史の専門研究者が出たが、彼らが学んだのは歴史記述には出来るだけ文書などの1次史料を用いるということであった。村上は1899年から3年間、スペイン・イタリア・オランダへ留学し、各地の文書館で多数の史料を筆写した¹⁵⁾。このうち慶長使節関係史料は1909年に『大日本史料』第12編第12巻として、天正使節関係史料は1959-61年に同第11編別巻1-2として刊行されている。

展覧会の開催

先に、仙台での支倉関係遺品の博覧会(1876)について述べたが、1879年には、長崎県が保管していたキリシタン関係遺品が博物館(1900年より東京帝室博物館)の所管となり、1906年に「嘉永以前西洋輸入品」の展覧会が開かれた¹⁶⁾。遺品のほか、絵画や文書、書籍が展示され、洋書は蘭学関係のものが多いが、鷹見泉石や松浦静山旧蔵の旅行記などが展示されている。1921年には京都のコレクター杉浦丘園蔵書による「和蘭及外国関係図書并物品」の展覧会、翌1922年には京都大学で「日英関係史料展覧会」、1925年には大阪で岡田伊三郎蔵書による「文化移入に関する古書展覧会」が開かれた。また、1932年に丸善が開いた「天正使節渡欧三百五十年記念珍籍展覧会」では、キリシタン版『ぎあ・ど・ぺかどる』(1599)を中心に、個人蔵のものを含めて200点を越えるキリシタン関係書が展示された。丸善は1952年にも「新回収キリシタン版を中心とした日本及び東亜関係古文献展覧会」を開いてい

る。その3年前の1949年はザビエル来朝400年にあたり、東京国立博物館で「日本初期西洋文化史展覧会」が、また東洋文庫で「日欧文化交渉文献展覧会」が開かれた。

コレクションの形成

1913年、日本研究者としても有名なE. Satow (1843-1929) の蔵書がサザビーズで売り立てられた。このうちイエズス会通信類のコレクション122冊を京都大学が翌年に購入している¹⁷⁾。3年後の1917年、岩崎久弥はG. E. Morrison (1862-1920) の中国関係蔵書2万4千冊を買い取った。この蔵書は、その後追加購入された2万5千冊とともに、1924年、新設された東洋文庫で公開されたが、この中に日本関係書が多数含まれている。翌年には天理図書館が設立され、1930年に本館が落成した。同館ではこの間、東西交渉やキリシタンに関係した書籍が購入され、1932年には168点を収録する『きりしたん伝道特殊本目録』が刊行されている。内田嘉吉 (1866-1933) は洋書のコレクターであったが、特に古地誌、航海記関係の古書を多数収集した¹⁸⁾。没後、蔵書は東京市立駿河台図書館に寄託され、現在は千代田図書館の蔵書となっている。幸田成友 (1873-1954) は1928～30年、留学地のハーグで日本関係書を400点ほど集め、このコレクションは1930年に三越で展示されている¹⁹⁾。

それでは、これらの書籍はどのようにして収集されたのであろうか。1909年12月、洋書輸入で有名な丸善が火災で全焼した。その時の様子を内田魯庵が書いている²⁰⁾ が、シーボルト、リンスホーテン、イエズス会の書簡集などと共にヨーロッパの稀覯書肆の目録数百種がすべて焼けてしまったという。当時、丸善はQuaritch、Maggs Bros.、Hiersemann、Nijhoff、Brill、Geuthner、Maisonneuve et Frèreといった古書肆のカタログから仕入をしていたようである。また、丸善以外に一誠堂や神戸のJ. L. Thompson & Co.²¹⁾ なども洋古書の輸入を行っていた。

外国人コレクター達

サトウやモリソン以外に日本関係書の収集家として有名な人物に、P. C. Blum (1898-1981) とC. R. Boxer (1904-2000) がいる。ブルームは横浜生まれのアメリカ人で、若いころから日本関係古書の収集を行なった。第2次大戦中、アメリカ海外戦略局に入り、戦後来日、1978年に帰国したが、その際7千点を越す膨大な蔵書を横浜開港資料館に譲渡した²²⁾。ボクサーは

ワイト島生まれのイギリス人で、軍人でありながら東西交渉史の研究者でもあった²³⁾。1930～33年には日本語担当将校として日本に滞在し、日本人研究者と交流した。本のコレクターでもあり、1937年には *Bibliotheca Boxeriana* という蔵書目録を刊行している。この年からイギリス諜報機関員として香港に滞在し、1941年に負傷、終戦まで日本軍の捕虜となった。彼の蔵書は一時、日本側に接収されたが、終戦後取り戻したという。戦後は東西交渉史の第一人者として教職につき、多数の著作を刊行した。また、彼の蔵書の大部分はインディアナ大学が購入した。

Laures師の来日

上智大学キリシタン文庫（1939年設立）の創始者J. Laures（1891-1959）はドイツ生まれのイエズス会士で、1928年に来日、上智大学で経済学を教えながら、日本キリシタン史も研究した。1931年、大学内に Catholic Information Bureau を設置して日本のカトリック文献を収集し、1933年には『日本カトリック図書目録』を刊行した。また、国内21機関で所蔵されているキリシタン関係洋書も調査し、1940年に『キリシタン文庫』を刊行した²⁴⁾。戦後の1957年には増補版が刊行され、さらに2002年からはデータベース化（Laures Rare Book Database）が行なわれ、現在はネット上に公開されている。

翻訳書の刊行

前に『大日本史料』が収録する慶長使節関係史料について述べたが、同史料には村上直次郎の邦訳も併せて掲載されている。村上は根本史料の邦訳を多数行なって、我が国での東西交渉史研究の礎を築いた。エヴォラ版のイエズス会日本関係書簡集 *Jesus; cartas que ...*（1598）の邦訳を1926年から『長崎叢書』などの叢書に分載し始め、前年には和田万吉訳『モンタヌス日本誌』²⁵⁾が刊行されるなど、原文からの邦訳が定着した。1933年の太田正雄（木下空太郎）訳G. Gualtieri『日本遣欧使者記』（1586年刊伊語原文からの邦訳）や1934年の大塚高信訳D. Collado『日本語文典』（市河三喜蔵の羅語原書の複製と併せて邦訳を刊行）、1944～45年の新井トシ訳L. de Guzman『東方伝道史』（1601年刊西語原文からの邦訳）など叢書に入らないものもあるが、1927年に駿南社から刊行され始めた『異国叢書』や『続異国叢書』で多数の日本関係洋古書の邦訳が刊行された。戦後も『大航海時代叢書』や『新異国叢書』などのシリーズが刊行され、基本文献の邦訳が続けられた。

複製本の刊行

1889年に美術誌『国華』がコロタイプ印刷されてから、美術書はこの技術で作られるようになった。日本の古典籍資料のコロタイプ複製も行なわれ、稀書である日本関係洋古書の複製も刊行された。東洋文庫は、1918年に購入したキリシタン版 *Nippon no Iesus no* … (1592) の複製を1928年に刊行したのを始め、当時幸田成友が所蔵していた E. de Sande: *De missione legatorum Japonensium* … (1590)²⁶⁾ の複製を1935年に刊行した。同文庫はこの他にも A. Calepino: *Dictionarium latino* (Amakusa, 1595) や S. Amati: *Historia del regno di Voxv* … (1615) などを戦後に複製刊行している。丸善も1943年頃、上記 Amati (1615) と、その独訳 (1617) の複製を計画し、印刷まで行なったが、刊行前に戦災で焼失したという²⁷⁾。天理図書館は1972年から、*Classica Japonica* という叢書で同館の所蔵する日本関係洋古書の複製を多数刊行しているし、キリシタン版については『天理図書館蔵キリシタン版集成』(1976) や『南欧所在吉利支丹版集録』(1978) などが刊行されている。なお、日本に関する英語文献の複製として島田孝右編『近世日本関係英国史料集成』(1999-2004) がある。これは、1800年までに刊行された英語文献のうち日本に関する記述のある部分を複製刊行したもので、非常に多くの文献を収録している。

戦後の蔵書形成

『キリシタン文庫』(1940) では453点であった国内で所蔵されているキリシタン関係洋古書(1853年以前刊行)の数は、前出『キリシタン文庫』(1957) では607点に、Laures Rare Book Database では785点にと、着実に増加している。特に1979年度に筑波大学が購入した Besson コレクションは、南フランスの愛書家 Paul Sarda の旧蔵書が核になっているが、サルダ氏はキリシタン資料のコレクターで、フロイス『日本史』の原稿も所蔵していた²⁸⁾。前出のブルーム・コレクションと共に、戦後、国内に入った大きなコレクションである。洋古書の輸入量は戦後に大きく拡大し、主に国内の洋古書を扱う書店を通じて、多数の日本関係洋古書が国内各機関で所蔵されるようになった。当館の場合でも、1957年に上野図書館所蔵の日本関係洋古書の数は43点であったが²⁹⁾、現在の所蔵点数は300点を越えている。1987年に大学共同利用機関として創設された国際日本文化研究センターは1998～99年に、所蔵する日本関係欧文図書目録を刊行した³⁰⁾ が、それによると同センターは10年間で214点もの日本関係洋古書を収集している。

戦後の研究方法

近代歴史学の導入のところで述べたように、歴史研究では1次史料を重視し、刊本のような2次史料は史料批判という作業の対象となっている³¹⁾。1960年代後半にローマのイエズス会文書館の文書が研究者に公開され、グスマン、バルトリ、クラッセ、シャルルヴォアなどの編纂した教会史は、もはやそのままでは使えないものとなった。文書のマイクロフィルムの収集も進んでおり、東大史料編纂所、上智大学キリシタン文庫で相当数が所蔵されている。これらを使うとエヴォラ版イエズス会書簡集の本文には原文からの改変が多数見つかるという。これを復元する作業が東大史料編纂所で行なわれ、『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集』（1990-2000）で1547～55年の部分の本文校閲と邦訳が刊行された。このように、原稿・刊本初版・異版・異刷などの間の書誌学的調査が現在の研究方法となってきた。

注

- 1) オランダ人が舶載した洋書のうち、あるものは商館職員向けのもの、また、あるものは幕府向けの商品であった。オランダ人から学問の教授を受けていた長崎の通詞達向けに舶載された本も多い。松浦静山ら蘭学好きの大名は彼ら通詞達から蘭書の購入をしている。
- 2) *Documenta Indica III(1553-1557) Romae*, 1954. pp.196-205. この史料は『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集 譯文編之二（上）』（1998）pp.250-270に邦訳が「1554年にパードレ・メストレ・メルシオールが日本に携行した物品の一覧表」という題で掲載されている。
- 3) P. Humbertclaude: *Recherches sur deux catalogues de Macao (1616 & 1632)* Toquio, 1942.
- 4) 村上直次郎訳『長崎オランダ商館の日記 第1輯』（1956）p.121.
- 5) 山脇悌二郎『長崎のオランダ商館』（1980）
- 6) 邦訳の数量把握のため、国文学研究資料館が公開しているデータベース「日本古典籍総合目録」（<http://base1.nijl.ac.jp/~tkoten/about.html>）を検索した。著者DBの分類項目に「蘭」や「独」などの国名を入れるとその国出身の著者が検索でき、その結果はオランダ人117、ドイツ人32、イギリス人28、フランス人18、アメリカ人14、ロシア人5、スウェーデン人4等となっている。彼らの著作のほとんどが科学、医学、軍事に関するものである。
- 7) 松田清『洋学の書誌的研究』（1998）による。平戸藩主松浦静山は163冊の洋書を所蔵しており、例えばケンペル『日本誌』を通詞吉雄幸作から買っている。これらの洋書は現在、松浦史料博物館に収蔵されている。
- 8) 向井昇「舶載洋書目録の考察—シーボルト再渡来時の将来蔵書目録—」、箭内健次編『鎖国日本と国際交流 下巻』（1988）pp.283-320.
- 9) 箕作や服部は *Trans. Asiatic Soc. Jap.* の初期の号に論文を載せている。
- 10) 例えば藤田茂吉『文明東漸史』（1884）はJ. H. Gubbinsが1877年に *Trans. Asiatic Soc.*

Jap. に発表した論文を活用している。

- 11) 幸田成友「日本西教史について」、『三田文学』v.2 (1927) 所収
- 12) 『太政官沿革志 9』(1987) p.345.
- 13) 1887年に島田壮介が横浜居留英国人「ゼームスウオーター氏」から本を借りて Kaempfel: *History of Japan* (1728) v.1, Book 4の邦訳を『日本古代商業史』と題して刊行しているが、これは太政官とは無関係と思われる。
- 14) 全訳は前者は木村太郎訳で1931年に、後者は吉田小五郎訳で1938-40年に刊行されている。
- 15) 『キリシタン研究 第12輯』(1967) pp.1-101.
- 16) 『明治三十九年特別展覧会列品目録』(1906) が刊行されている。
- 17) *Annual letters of the early Christian missions from Japan, China, etc. (1544-1649) in 122 vols. Chiefly collected by Sir Ernest Mason Satow ...* という目録が刊行されている。またネット上に「京都大学附属図書館所蔵アーネスト・サトウ旧蔵書コレクション目録」(<http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/satow/index.html>) も公開されている。
- 18) 目録は『内田嘉吉文庫稀観書集覧』(1937) が刊行され、千代田図書館はこの目録をネット上に (<http://www.library.chiyoda.tokyo.jp/search/uchida.html>) 公開している。
- 19) *A short list of books and pamphlets relating to the European intercourse with Japan* (1930) という目録が刊行されている。幸田蔵書は没後、慶応義塾図書館(一部は一橋大学附属図書館)へ入った。
- 20) 「灰燼十萬卷(丸善炎上の記)」、内田魯庵『魯庵の明治』(1997) pp.148-166.
- 21) J. L. Thompson は日本関係書の英語での出版も行なった。
- 22) 『ブルーム・コレクション書籍目録 第1巻』(1982) pp.i-xxxiv.
- 23) D. Alden: *Charles R. Boxer; an uncommon life* (2001)
- 24) この書誌は全部で851点の資料を収録しており、うち453点が洋古書(1853年以前に刊行)である。この453点について所蔵点数の多い機関を挙げると、東洋文庫155、天理図書館121、京都大学111、上智大学83、東京大学80、丸善78、幸田文庫57などとなる。
- 25) モンタヌス『日本誌』初版は1669年にアムステルダムで刊行され、翌年、J. Ogilby による英訳が刊行された。この邦訳は英訳からの重訳。
- 26) 1942年には泉井久之助らにより『天正年間遣欧使節見聞対話録』と題した邦訳が、同じ東洋文庫から刊行された。
- 27) 八木佐吉「幻の「伊達遣使録」、『書物往来』(1975) pp.15-21.
- 28) 1931年、Schilling 師がサルダ文庫中に「マカオ司教区史資料集」と「日本司教区史資料集」という写本を発見。それぞれ、フロイス『日本史』の1583-87年、1588-93年の部分であることが確認された。
- 29) 弥吉光長「日本歴史地誌関係洋書目録稿」、『上野図書館紀要 第三冊』(1957) pp. i-xxxii.
- 30) 『国際日本文化研究センター所蔵日本関係欧文図書目録—1900年以前刊行分—』(1998-99)
- 31) 五野井隆史『日本キリシタン史の研究』(2002)、特にpp.1-21:「序 キリシタン史研究の現状—欧文史料による研究を中心として—」

(おりた ひろはる 収集部外国資料課)